

## 伊勢山(御神木)等の説明

### [織田信長と御遷宮材について]

天正13年(1585)伊勢神宮内宮外宮の正遷宮が行なわれた。この遷宮は織田信長の勸進によって始められ、採出事業は天正10年(1582)から着手された。この時の御杣山は木曾山とされ、場所は南木曾町川向の「伊勢小屋山」で、そこから御遷宮材を伐り出したと伝承されている。しかし信長はこの御遷宮が成就しないうちに、天正10年6月2日京都本能寺において明智光秀に殺されるが、この時のこととして『伊勢太神宮神異記』に次のように記されている。

天正十年六月二日木曾川向にて信長公京都にて御生害なり、  
早々伊勢へ帰るべしと呼びけるは誠に不思議也云々

信長暗殺を告げる声その日に木曾の御杣山である「川向」において聞こえたと記されているのである。この不思議な現象の記述から、信長が御遷宮材を伐り出した場所は、伊勢山(矢立山)だったことが知られる。現在も用いられている「伊勢山」「伊勢小屋山」「伊勢小屋沢」などの地名は、この時の御遷宮材の伐木運材に由来していると考えられる。「伊勢」とは文字通り伊勢神宮御遷宮に関係した名称で、「小屋」とはそれに従事した杣や日用が宿泊施設として小屋掛けしたことによるものであろう。

なお信長の横死もあって、この時の御遷宮材は後を受けた羽柴秀吉によって、伊勢宮川の上流の江馬山や大杉山から伐り出されたようである。

織田信長が南木曾の伊勢山から御遷宮材を伐り出すことにしたのは、この年の3月11日に宿敵であった甲斐の武田勝頼を滅ぼして、信濃と甲斐を領国に加えたことにより、木曾川を自由に使うことが出来るようになったためである。それまで信長の勢力範囲は美濃国までで、木曾川はおろか木曾山には一切手出しができなかったのである。この頃伊勢神宮周辺の山は伐り尽くされて、御遷宮に適した良材がなくなっており、信長がいち早く木曾山に目を付けたのは当然のことであった。なお武田氏が滅びたきっかけは、御親類衆でもあった木曾の領主木曾義昌が織田信長に寝返ったことによる。

鉄道や道路が発達するまで、河川は木材の搬出路として極めて重要であった。豊富な木材が成育していても、搬出路がなくては宝の持ち腐れである。信長は木曾川の水の力を利用して、山深い木曾から御遷宮材を伊勢湾まで搬出したのであった。

なお、木曾川の支流の小河川を堰や修羅などを用いて搬出することを小谷狩りといい木曾川本流を流すことを大川狩りという。現在の八百津町にあった錦織綱場までは川に巨岩が多いため一本一本流したが、これを管流しと称した。錦織綱場では、木曾川を横断して太い綱を張り、ここで流れてきた材木を集めて筏に組み、伊勢湾を目指したのであった。

さて南木曾町田立は、伊勢神宮御遷宮材の伐木運材に従事した伊勢の杣・日用が住み着いた所であるといわれている。田立には、小幡、宮川、大宮、長瀬などの姓が多いが、伊勢神宮周辺には今でもこれらと同じ地名が確認される。杣や日用の技術は、伊勢神宮御遷宮材の伐木運材によって木曾に伝えられ、「木曾式伐木運材法」として確立されたのである。なお江戸末期安政7年(1860)の史料から、この年田立村から4名の者が先祖の地である伊勢の大宮町付近を訪ねたことが知られている。